

『雨女とアメ男』 作：岩本憲嗣

■あらすじ

その日、井原晴香（28）は朝から登山をしていた。かつて父と一緒に何度も登ったことのある英彦山。昔を懐かしむように景色を楽しんでいたのも束の間、急な雷雨に見舞われ慌てて休憩所へと駆け込む晴香。

そこには既に先客が一人おり、二人は暫くの間一つ屋根の下で雨宿りをすることになる。やや古めかしい……というよりはダサイ身なりのその男は、ずぶ濡れの晴香に手ぬぐいを差し出すとポケットからボンタンアメを出し勧めてくる。

ニコニコと語りかけてくる登山客の話に、晴香は不思議と親近感のようなものを感じ、いつしか同じように自分のことも語りだす。もうすぐ父の七回忌法要があるということ。

夫には休みを取って欲しいと伝えていたのに約束を破られてカンカンに怒っていること。そんな夫に置手紙を残して一人東京からこっちに帰って来たということ。

登山客はそんな晴香に対して、笑みを浮かべながら思いもよらぬ返答をすると、雨が上がるなりその場を立ち去ってしまう。

直後、晴香の携帯が鳴る。

電話の主は夫である満（30）であった。

慌てて晴香の実家にやって来たという満。そんな満との会話の中で晴香は登山客に感じた妙な親近感の正体を知るのであった。

■登場人物

井原晴香（28） OL

井原満（30） 晴香の夫

登山客

SE 早朝の登山道。一人歩を進める晴香。荒い息遣い。

晴香 M 「山頂まであと少し。登山なんて一体何年ぶりだろう。父さんが元気で……そう、私
がまだ学生だった頃だから……もう10年近く前か。そうだよ、最後の登山もここだった。
私たちにあって山といえばいつだってこの英彦山を指してたんだよね」

SE 鈴尾を鳴らし拍手を打つ音。

晴香M 「いつ来たたってやることは同じ。山頂でお詣りをして……」

SE 晴香が展望台に向かって駆ける音。

晴香 「(大声で) ふざけんよ！この馬鹿旦那！守れない約束なら最初からするなっつうの！馬鹿馬鹿馬鹿ああ！！」

晴香M 「……展望台から思いの丈を全力でぶちまける」

晴香 「……はは、はははは。一緒、全部一緒。あの頃と同じ事してる。この景色も同じ、気持ちいいのも同じ。はあ〜」

晴香M 「……同じ？ううん、それは少し違うかもしれない。ちょっと来ない間にここも随分変わったよね。スロープカーだけ？あんなの昔はなかったし、休憩所だって随分綺麗になってた。それに何より……」

SE 携帯電話の震える音。

晴香 「まただ。まさかこんな山の天辺でも携帯が繋がるだなんて」

SE 携帯電話を切る音。

晴香M 「今は声なんて聴きたくない。私の名前と同じ、晴れ渡った山の香り。この中に包まれて溜まりに溜まったイライラを存分にデトックスするのが……」

SE 辺りに雨が降り始める音。

晴香 「ん？嘘……雨？」

SE 雨はいつしか雷雨へと変わり、近くに激しい落雷の音。

SE 休憩所内。外では雨が強く降りしきっている音。そこに晴香が駆けて入って来る

音

晴香「最悪、んもう、これだから山の天気は……ムカつくっ！」

登山客「ははは、災難でしたね。よかったら、どうぞこれ」

晴香M「声のする方を振り返る。どうもこの休憩所には先客がいたようだ。30代半ばだろうか、使い込んだリュックに今時なかなか見かけないような大きなフレームの黒縁眼鏡の男性が気さくに手ぬぐいを差し出してくる」

登山客「まだ使っていないから綺麗ですよ」

晴香「あ、有難うございます」

晴香M「黒縁眼鏡の彼から手ぬぐいを受け取る。ずぶ濡れになった頭を拭きながらも一度彼の方を見やる。何も黒縁眼鏡だけじゃない。服装も、雰囲気もどこか古臭いというか……悪く言ってしまうえばダサ……」

登山客「どうかしましたか？」

晴香「え？いや、何でもないです。どうも有難うございました」

登山客「いえいえ、あ、これ食べます？」

晴香「これ……ボンタンアメ？」

登山客「ええ。お嫌いですか？」

晴香「いえ……なんか久しぶりに見たなって……いただきます」

登山客「女性一人で山登りですか？」

晴香「……まあ、ここ登り慣れてますから」

登山客「本当ですか。にしてもまた随分早い時間から」

晴香「朝一の飛行機で東京から来て、そのままここだったもので」

登山客「成る程、道理で方言がないと。実は私も東京なんですよ」

晴香「そう……なんですか？」

登山客「はい。妻が出産でこつちの実家に戻ってまして、久々に私も。で、まあ安産祈願がてらといますか。ははは」

晴香「わざわざ山頂までお詣りに？奥さんの為に？……なんか偉いですね」

登山客「とんでもない。貴方はお詣りは？」

晴香「済ませました、あと展望台も」

登山客「ああ、あそこ私も好きです。この時間だと人もあまりいないから大声で叫ぶと実に気持ちがいい」

晴香「え？叫ぶ」

登山客「はい。大声で思いの丈を。ははは」

晴香「へえ……いるものなんですわね、同じようなことする人って」

登山客「というど……貴方も大声を？」

晴香「……まあ、憂さ晴らしっていうか？」

登山客「はい？」

晴香「昔から父に言われてたんです。ここの神様はお前にとって特別なんだ。だからお詣りした後は思ってること包み隠さず全部吐き出して神様に聞いてもらいなさいって。それでさっきまで山頂で叫んでました。旦那の悪口」

登山客「悪口ですか？」

晴香「はい。そうだ、後で爪の垢貰ってもいいですか？」

登山客「爪の垢？ええと……」

晴香「冗談です。でもウチのにも見習わせたいですよ。ウチは私が妊娠しても絶対安産祈願なんてしっこないですから」

登山客「そうですね」

晴香「結婚するまでは過保護なくらいだったのに、今じゃ事あるごとに仕事が忙しいだなんだって、そればかり。平気で約束だって破るし……」

登山客「約束ですか」

晴香「父の七回忌法要があるんです。だから絶対に仕事は入れないでって言ったのに……。頭来たから置手紙残して一人で帰って来ちゃいました」

登山客「だから朝一で」

晴香「でもここに来て分かりました。結局はこの山と一緒になんです。あの人も、多分私も。変わらないと思っても実は色々変わっちゃってるっていうか」

登山客「成程……いやはや、実に耳が痛い」

晴香「え？」

登山客「私も同じようなものですよ。昔と比べれば良くも悪くも色々変わってしまった。ただですね……旦那さんを少し擁護するならば、私なんかからすると女の人だって、何と云うか……まるで山の天気のように思える」

晴香「変わりやすいってことですか？」

登山客「はい。何で急に怒られたのか分からないことの実に多い……」

晴香「それは気づかない方が鈍感なんです。そもそも……」

登山客「ですよ。確かにその通りだ。でもそれでいいんです。喧嘩も沢山したらしい。ほら仰ったでしょ、旦那さんはまるでこの山だと」

晴香「それが何か……」

登山客「英彦山に何度も登っておられるならきつとご存知の筈だ。雨が降った後のこの山の実に美しいのを」

晴香「それ……」

登山客「私は雨上がりの景色が一番好きなんです。美しい陽光に照らされる濡れた山の緑。辺りに漂うかすかな雨の香り。そう、優しい晴れの香りに包まれた景色とでも言うんですかね。夫婦ってのはそうやって共に美しい景色を創り楽しんで行くものなんじゃないかって……男の勝手な言い訳です、ははは」

晴香「……………その」

登山客「にしても、雨なかなかやまないですね。参った……」

晴香「待って下さい、携帯で天気予報でも……………あれ？電波入らない？」

登山客「あ」

晴香「どうしました？」

登山客「やっぱり変わりやすい。雨、止んだみたいですね」

晴香「本当だ」

登山客「では、私は妻の空模様が変わる前に帰るとします。すみません、無駄話に付き合わせてしまって」

晴香「待って下さい！！その……………元気な赤ちゃん産まれるといいですね」

登山客「はい。いつか子供が大きくなったら一緒に山登りしようとも思ってるんですよ。子供にとつちや迷惑かもしれないですがね、ははは」

晴香M「黒縁眼鏡の彼はにこやかに会釈をするとそのまま外に出て行った。気のせいだろうか、心なし彼の進む先がいつもよりもずっと綺麗な陽光に包まれているように見えたのは……………ふとさつきまで彼の腰かけていた場所に目を落とす。そこには箱のまま置き忘れられたボンタンアメ。忘れたんだ。まだ間に合うだろうか」

SE 晴香の駆けだす音。直後に土砂降りの雨の音

晴香M「私が外に出た瞬間、辺りは土砂降りの雨に包まれた。天気が変わりやすいにしてもあまりすぎる。まるで、さつきからずっと降り続けていたような……………晴れていたのは幻か何かだったような激しい雨」

SE 晴香の携帯が鳴る音。

晴香「あれ、電波入るんだ？……………お母さんから？（電話をとって）もしもし？」

満「晴香？良かった、出てくれたんだ」

晴香「え？……………満さん？なんで？だってこれお母さんの携帯番号……………」

満「今晴香の実家にいるんだ。何度も電話したけど出て貰えなかったから……………ごめん、お義母さんの携帯を借りて……………」

晴香「は？実家ってどういうこと？」

満「そりゃこっちの台詞だよ。あんなドラマみたいな置手紙残して」

晴香「は？だってそれはそっちが……」

満「悪かった。確かに今回は俺が完全に悪いと思ってる。だから……」

晴香「いや、だって仕事は？」

満「それは……どうにか都合つけてきた」

晴香「そんな簡単に都合つくものなの？」

満「簡単なものか、無理矢理だ」

晴香「大丈夫なの？」

満「大丈夫かと言われれば……まあそれは晴香が気にすることじゃないだろ」

晴香「いや、無理してくれたのは有り難いけどさ、でもそれで仕事に影響出たら」

満「だからそれは晴香には関係……」

晴香「あります！なにそれイライラする」

満「またそれか？最近お前イライラしすぎじゃないか？」

晴香「はあ？誰のせいよ」

満「俺って言いたいんだろ、まあ多少は無くも無いだろうけど、そうじゃなくて……他の原因もあるんじゃないか、その……何ていうか……」

晴香「何？」

満「言わせるなよ、心当たりあるだろ、どうなんだよ、体調の変化とか……」

晴香「何の話？ああもうっ！あ、そうだ。ビタミン摂取と」

満「え？なんだって？」

晴香「(ボンタンアメを口に含みながら) あんでもあい、こっちの話」

満「何か食いながら話してる？」

晴香「え？ボンタンアメだけど？」

満「ボンタンアメ？……なんだ、晴香も好きだったのか？」

晴香「も？」

満「さつきまで子供の頃の晴香の写真見せられてたんだ。お義母さん、俺がお義父さんの若い頃にそっくりだって言うんだ。おっきな黒縁眼鏡でニコニコしててさ、晴香と二人で山登りしてる写真沢山あった。お義父さんいつも手にボンタンアメ持ってたぞ。好物だったから今でもたまに仏壇に供えて……」

晴香「待って……そうだ……私……やっぱりあの人……でも何で？どうして？」

満「晴香？」

晴香「ねえ、お母さんにも写真片付けなくてって言うておいて、絶対だよ」

満「どうしたんだよ急に」

晴香「急じゃないの、これだから男は……あ……雨……やんでる」

満「何なんだ？さつきからコロコロと」

晴香「え？…：そうか…：うん。そうだね、じゃあこれでいいんだよ」

満「いい？何が？」

晴香「だから！こういうのも含めて私たちっていうか…：だからさ、これからも仲良く喧嘩しよう」

満「は？何だそりゃ？」

晴香「とにかく！すぐ帰るから、待ってて」

SE 携帯を切る音。

晴香「雨上がりの英彦山…：本当だ…：凄く綺麗…：」

SE 箱からボンタンアメを取り出し口に含む音。

晴香「私も…：大好き」

【終】

※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) まで「」報頂けますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)